

第32回

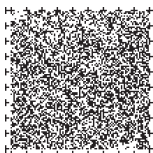
# 全国中学生 人権作文コンテスト 入賞作文集



人権イメージキャラクター  
人 KEN まる君



人権イメージキャラクター  
人 KEN あゆみちゃん



この冊子には音声コードが、各頁  
(奇数頁 左下、偶数頁 右下)に印  
刷されています。  
専用の読み上げ装置で読み取る  
と記録されている情報を、音声で  
聞くことができます。

Human Rights

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会



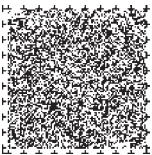
すべての人間は、生まれながらにして  
自由であり、かつ、尊厳と権利とに  
ついて平等である。人間は、理性と  
良心とを授けられており、互いに同胞  
の精神をもつて行動しなければならない。

—— 世界人権宣言 第一条 ——

# 第三二回

# 全国中学生人権作文コンテスト 入賞作文集

法務省人権擁護局  
全国人権擁護委員連合会



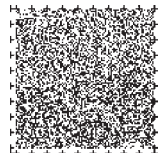
# はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和五六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生が、人権問題についての作文を書くことにより、人権尊重の重要性及び必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けることを目的として実施しているものです。

三二回目となった平成二四年度は、各都道府県単位（北海道については、札幌法務局並びに函館、旭川及び釧路の各地方法務局単位）で実施された地方大会に、六、八一九校の中学校から過去最高となる九三万七二二八七編にも及ぶ多数の作品が寄せられ、中央大会には、地方大会の審査を経た代表作品九七編が推薦されました。

この作文コンテストへの応募作品は、いずれも中学生らしい感性に富み、純粹な感覚で人権問題を捉えたものばかりであり、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

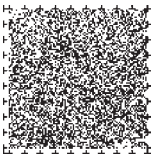


この作文集をより多くの方々に御愛読いただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願ってやみません。

おわりに、この作文コンテストの実施に当たり、多大な御尽力をいただいた全国各地の教育委員会、中学校等関係各方面の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

平成二五年二月

法務省人権擁護局  
全国人権擁護委員連合会



## 目次

## 【審査講評】

中央大会審査員長

落合 恵子

6

## 【入賞作文】

## 内閣総理大臣賞

「一滴の涙」ある夏の出来事

岡山県・赤磐市立桜が丘中学校三年

森永 翔太

10

## 法務大臣賞

「リスペクト アザース」

神奈川県・鎌倉市立御成中学校三年

坪井 洸

14

## 文部科学大臣奨励賞

聞いてください、私の思い

新潟県・柏崎市立松浜中学校三年

蓬田 怜奈

18

## 法務副大臣賞

あたりまえの普通

茨城県・土浦日本大学中等教育学校三年

廣瀬 裕貴

22

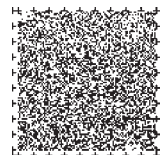
## 法務大臣政務官賞

架け橋

愛媛県・松山市立南中学校三年

井門 珠栄

26



全国人権擁護委員連合会長賞

僕の父親

熊本県・熊本県立八代中学校一年 松田 裕季

30

一般社団法人日本新聞協会会長賞

オリンピックから見る人権問題

鹿児島県・霧島市立霧島中学校三年 英 みずき

34

日本放送協会会長賞

「トイレの絆」

高知県・芸西村立芸西中学校三年 岡林 一輝

38

法務事務次官賞

「立ち止まる」

東京都・小金井市立小金井第二中学校二年 熊谷 瑞生

42

小さな段差、大きな障害

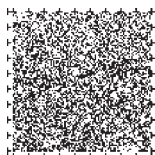
埼玉県・学校法人開智学園開智中学校一年 榎本 毬乃

46

鉄ちゃんへ

宮崎県・宮崎大学教育文化学部附属中学校三年 坂元 遼太郎

50

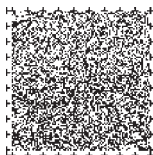


## 審査講評

## 「ひと、であること」

中央大会審査員長

おちあい  
**落合**  
 けいこ  
**恵子**



二〇一二年のクリスマススウィーク。この講評を書いている部屋には、ジョン・レノンとヨーコ・オノの、この季節定番の曲、『ハッピー・クリスマス』が流れている。……老いも若きも、裕福なものもそうでないものも、肌の色がどんなであらうとも、ハッピー・クリスマスを、と歌うこの曲には、子どもたちの歌声でおなじみのあのフレーズが続く。

♪……WAR IS OVER, IF YOU WANT IT……♪そう、戦争は終わる。あなたがそうと望むなら、と。

長年、ささやかながら人権について書いたり活動をしてきた大人のひとりとしてこの歌を聴くと、差別についても同じことが言える、としみじみと思う。

「差別」という名の悲しくも痛ましい『WAR』もまた終止符を打つことができるはず、「H」



YOU WANT IT]である。

むろん欲し望んでいるだけでは、祈っているだけでは、わたしたちの社会は変わらない。それぞれのあなた（わたし）が、こうありたいと望む人権を軸にした社会や人間関係を築くために、自分が何を引きだし、何を引き受けるかが大事なはずだ。ひとつの体験は、そこから何を引きだし何を引き受けたかによって意味は大きく変わる。

そうしてここに集まったそれぞれの作品は、体験から何かを引きだし、何かを引き受けるという「自分との約束」を見事に果たしたもののばかりだ。

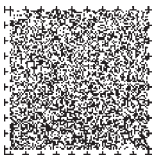
過去最高の応募作品があった今回のコンテストの最終審査があったのは一二月半ばではあったけれど、わたしの内側では前掲の『ハッピー・クリスマス』が鳴り響いていた。

「いじめ」に関する作品が多かったが、どの作品にも、人権に対する深く熱く真つ直ぐで清新な思いが溢れていて、心が震えた。

むろん、優れた作品の中からさらに限りある数の作品を選ぶとなると、審査員一同、毎年のことながらとても緊張したが……。

森永翔太さんの『「一滴の涙」ある夏の出来事』。心躍る家族旅行中に出あった一軒の家。窓が割られたそれは、犯罪の加害者の家族の家で、加害者の母たちが人目を避けてひっそりと影のように暮らす家だった……。

メディアの報道も含め、犯罪被害者の人権、プライバシーによりセンシティブであることはむろん基本だが、同時にわたしたちは、加害者の取り残された家族に寄



り添うことも忘れてはならないはずだ。ある状況にいるものの人権は関係ない、何をしてもいい、ということでは、その社会に真の意味で人権意識は成立していないことになるのだから。ネット時代には特に気をつけたいテーマでもある。

ワイドショーなどでは、加害者はもとよりその家族をも鞭打つような報道がされる場合がある。わたしたちが語り合わなくてはならないのは「噂」や「中傷」のレベルのそれではなく、なぜそのような犯罪が起きたかであり、その「なぜ」を懸命に解きあかすことで、被害者も加害者をも生まない社会と人間関係を築きあげることなのだから。それにもかかわらず、わたしたちの社会はそのことに少なからず失敗し続けている。

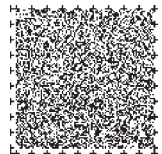
森永さんの作品は、わたしたちの内側に潜むそういった「無意識の人権侵害」に、真っ直ぐに切り込んだ力作である。そこには、明日への扉を拓く鍵が見える。作品に登場するお祖父様の言葉もまた心に残る。

坪井 洗さんの『リスペクト アザース』。他者を尊敬しようという意味だ。知り合いのアフリカ系アメリカ人の高齢者から、次のような話を聞いたことがある。

「妻もわたしも、この米国でアフリカ系ということ、少なからぬ人種差別を受けてきました。それでも妻は怯みませんでした、わたしよりも差別と果敢に闘って生き抜いてきました。闘うことが目的なのではなく、差別と闘わなくてもすむ社会の実現を目指して……」。

そして彼は言ったのだ。

「わたしは妻を心から RESPECT しています」と。



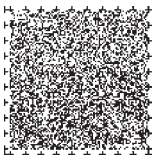
他者をリスペクトするためには、かけがえのない人生を生きる自分自身へのリスペクトも忘れてはならないが。

福島第一原発の過酷事故が起きた町で暮らしていた蓬田怜奈さん。避難先における経験から、「人権」により敏感になり、掘り下げる機会を「体感」していく彼女の心の風景が、そして、ひとつひとつの言葉が心に響く秀作。

わたしたちは忘れてはならないはずだ。今この時にも福島では、およそ一六万人の人たちとも居たところに戻ることができずにいるという事実を。それ自体、大きな人権問題である。

その他、心に残った作品がたくさんあるが、文字数の関係ですべてに触れることはできないのが残念だが、審査員のすべては「あなた」に心からお礼を申し上げる。素晴らしい作品をありがとう！と。

差別を作ったのが、そしてそれを再生産したのが人であるなら、わたしは信じよう、差別をなくし、人権を拡充することができるのも、それぞれのひとである、と。



内閣総理大臣賞

## 「一滴の涙」ある夏の出来事

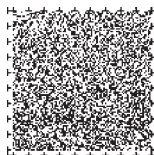
岡山県 赤磐市立桜が丘中学校 三年

もりなが  
森永 翔太

家族旅行中の出来事。一軒の家が目飛び込んできた。その家は窓が割れ、建物はボロボロ。そして一番の衝撃は、「人殺し、出て行け、化け物」などの卑劣な言葉。塀に沢山のビラ。その時下を向いたおばあさんと若い女性が見渡しビラを外し、逃げる様に家に入って行った。「何この家。何で？」と聞いた。「息子が人殺しをした。当たり前だ。家族も同様な罪を受けるべき」と運転手が答えた。疑問に思ったがそのまま旅館に行った。

温泉に入り僕は、こんな幸せな時はあのおばあさん達無だらうかと、ふとそんなことを思い、あの二人の悲しい顔が脳裏をかすめた。

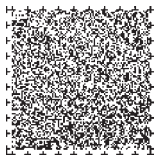
部屋に戻り皆に聞いてみた。「家族まで同じ罪を受けないと駄目？」反対に質問された。「翔太はどう思う？」僕の家ではまず僕自身の考えを述べて、それについて皆で話し合うのだ。すぐに



返答出来なかった。すると祖父が「お前はもう十四歳。善悪は分かるはず。旅行に来てまで暗い話だがこれは勉強よりも大切な事。よく考えて答えてみる」と言った。僕は五分〇十分考え答えた。「犯罪者の人の家族があんな思いをするのは可哀想だと思う。犯罪者本人だけではなく、家族まで。あの卑劣なビラはひどい。窓も割るなんて」そう言い下を向いた。「そうだな。翔太の言う通りかもしれない。世の中はこういうものだ。十人居たら十人の考えがあるが、卑劣だな。」と祖父は言った。「親のしつけが悪いとか、兄弟姉妹が支えていないなどと運転手さんが言ったけど、僕は間違っていると思う」と言うと、「何が間違っていると思う?」と聞かれた。答えようとしたり時、食事の時間になった。そして祖父が「まだ何日か滞在する。よく考えなさい。」と言った。夕食を食べながらも僕は心からノリノリになれなかった:あの白髪頭の痩せこけた青白いおばあさんの顔が頭の中から消えなかったからだ。「ああ僕はこんな幸せな時間をあじわっているのか:。」

次の日は雨が降っていた。そしてあの家の前をまた通った。濡れながら、また庭を見渡しているおばあさんがいた。その瞬間おばあさんが倒れた!僕は「車止めて!」と叫んだ。そして祖父と一緒におばあさんまで走った。「大丈夫?」と言うと、おばあさんが細い声で答えた。「大丈夫です。」

「はい、どうぞ」と言い持っていたハンカチを渡した。そうすると、「ありがとうございます。ございます。ありがとうございます。」と言ってくれた。雨ではなくその顔には一滴の涙が流れていた。その時、運転手が来て「行きましよう。相手にしたら駄目です。」

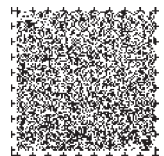


と言うので僕は濡れながら大声で叫んだ！「関係ない！大人なのに常識がない！おばあさんには関係ない。困っている人が居れば僕は助ける。あなたは間違っている。加害者の親だけど、今は被害者だ！」と言った。僕は年上の運転手さんに偉そうに言ってしまったので、恐る恐る祖父の顔を見た。そうすると祖父は僕の頭を大きな

手で撫でてくれた。そして祖父は「運転はもういい。金はこれで足りるだろ。非情な人間の運転は信用ならん。孫の言う通り。ここから自分で行ける。むしろ大人が次の世代を担ってくれる子どもの手本にならんとあかん。あんたは駄目だ！」と言った。運転手さんは下を向いて黙ってそこから立ち去った。

急いでおばあさんの方へ皆で行った。娘さんが出てきて僕たちの顔を見て驚いた様子だった。おばあさんが「事件以来優しさをもらったのは初めて。死んでも悔いはありません。」と言った。それを聞き祖父が「あなた達は何も悪くない。だが被害者の事そしてその被害者にも家族が居た事を決して忘れずに生きましょう。死んではいけない。息子のした事に目を背けず、しっかりと生きなさい。そして妹さん、あなたは全く関係ない。しかし兄が犯罪をすると全てを失うでしょう。しかし、人生は長い。下を向かずお天とさんを顔いっぱいにあびなさい。」と笑顔で言うと、二人共大声で泣き出し、そして少し微笑んだ。

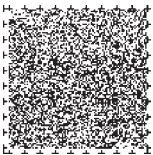
旅館に戻った。「加害者の家族は最後には被害者になるのかもしれないな。翔太、今回の事を一生忘れず生きなさい。自分が悪い事をする大切な家族が辛いことになる。そして相手にも大切な家族がいる。今の世の中は人権がない。あると言いながら今回の様な場合はない。テレビな





どの報道の仕方が悪い。犯罪は駄目だ。だから絶対に犯罪者にもなるな、そして差別をするな。分かったな。」と言われた。ぼくは、「絶対にしない！そして差別もしない！周りの人の言葉だけを信じるのではなくこの目で必ず確かめるよ。」と言うと家族皆が「翔太は大人より最高だね。子供の綺麗な心を大人になっても忘れなければこの世は最高になるはずだね。」と言ってくれた。祖父は僕の顔をもう一度撫でてくれた。

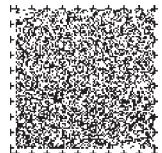
今あの家族はどうだろう…一滴の涙よりも「二人の間だけの笑顔を」取り戻して欲しい。



法務大臣賞

## 「リスペクト アザース」

神奈川県 鎌倉市立御成中学校 三年

坪井 洸  
つぼい こう

僕は、日本人の両親を持ちながら、アメリカのサンディエゴで生まれて、十歳半まで生活し、地元のデイケア（保育園）、プレススクール（幼稚園）、小学校に通った。その中で出会った先生たちが何度も口にした『respect others（リスペクト アザース）』という言葉は、今も僕の行動や考え方に大きな影響を与えている。

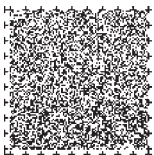
サンディエゴは、ロサンゼルス以南にあり、メキシコの国境から一時間程度だったので、土地柄のせいかな、クラスには、肌の色も髪の毛の色も本当にいろいろな人種の人があった。僕が物心ついたときには、周囲にいろいろな人種の人たちがいるのが当たり前の状況だったので、自分がまわりの人と違っていても当然だと思っていたし、それに対して深く考えることもなかったように思う。どこの国でも同じだと思うが、集団生活が始まると、誰かが意地悪をしたとか、誰かが誰かにいじめられたとか、いわゆる人間関係のトラブルが起こってくる。そんなとき、先生た



ちは必ず『リスペクト アザース』と言い、当事者に反省を促した。『リスペクト』の意味もはっきりわからない保育園や幼稚園の頃から、ことあるごとに繰り返し叩き込まれた。日本語にすると、「他の人のことを尊重しなさい」というような意味なのだが、今思うと「意地悪しないで、みんな仲良くしなさい」とか、「いじめはダメ」というそのときの行動を注意するのではなく、その行動を起こしてしまった根本の考え方を問題にしていることになる。

また、この言葉は僕が入っていたリトルリーグの監督やコーチもよく使っていた。選抜テストがない地元のリトルリーグでは、上手い選手と上手くない選手が混合して十二人でチームとして試合に臨まなくてはいけなかった。上手くない選手がフライをポロリと捕りそこなったとき、チーム全体が「おい、この下手くそ」と怒鳴りたくなる場面で、監督やコーチは『リスペクト アザース』と言った。やる気がなくてエラーをするのもっての他であるが、やる気があっても上手くできない選手はいるのである。この場合は、そこをわかってやれという意味だと思っている。実際、当時初心者だった僕は、この言葉を聞いて救われる気持ちになり、もっと上手くなるようにうんと頑張り、シーズン最後にはチームに少しは貢献できるようになった。

その後、僕は日本の小学校に通い始めた。周囲のみんなのおかげで生活にはすぐに慣れたが、同時に大きなカルチャーショックも受けた。一番驚いたことは、みんなが他の人と同じく大きく違わないように、なるべく同じようになるように非常に気を遣っているように見えたことである。他人よりうまくいかないから目立たないようにしているのではなく、他人よりうまくできても目立たないようにしているように感じた。僕は最

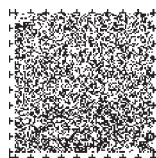


初のうち、そのノリがわからず今までどおり、自分が上手く出来たことを周りの人にも伝えていたら、「それは自慢だ」と言われて、なんとも悲しい気持ちになった。また、友達同士で相手の気持ちになれば絶対言えないような侮辱するようなひどい言葉を言い合っている、『冗談』と言っているやむやみにしていることにも驚いた。僕がよくわからない世界だった。僕が叩き込まれていた『リスペクト アザース』の世界はここにはなかった。

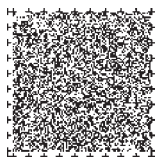
僕の限られた経験の話になるが、アメリカ（サンディエゴ）ではなぜそんなに『リスペクト アザース』を子どもの頃から叩きこんでいるのだろうか。

それは、アメリカ社会がつい最近までひどい人種差別などを行ってきたことの反省からかもしれない。居住地区を制限したり、公園やバスなどの公共の場でも座る場所をわけていたり、差別することが当たり前で、一般人が差別したりされたりすることに何の疑問を持たずに時代が流れていた過去がある。そんな過ちをこれから先に繰り返さないように、子ども達に叩き込んだり、またそうすることによって、大人も自分自身を戒めているのかもしれない。

僕は日本でもっと、『リスペクト アザース』が浸透していけばいいと思う。日本は表面上差別のない社会なので、必要ないと思われるかもしれない。しかし、これこそが人権を考える上での基本だと思う。人権尊重の社会を作っていくのは、僕たちひとりひとりの考え方によるからだ。同じ人間は一人もいない。人と違っていることがまたその人の個性である。違う点だけでなく、うまくいったこと、できなくても努力していくことなどを尊重し合っていくことができれば、



もっと素晴らしい社会になっていくと思う。

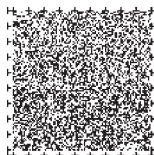


文部科学大臣奨励賞

# 聞いてください、私の思い

新潟県 柏崎市立松浜中学校 三年

よもぎた  
蓬田 怜いな  
怜奈



大熊町。緑の木々と青い海に囲まれた自然豊かな私のふる里です。そして、あの原発事故が起きた町。私のふる里は一瞬にして「死の町」とまで言われる誰もが嫌い、イヤがる町になりました。それまで私にとっての「人権」とは人間が生まれながらもっている権利と学校の授業で習った程度で、特に気にもせず考えもしないただ聞いたことのある言葉でしかありませんでした。

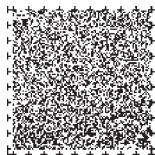
しかし、避難してからは、同じ福島県内でありながら、耳に入ってくる話は「福島ナンバーの車がいたずらされた」「転校していった子が放射能のことでいじめられた」などの悲しい話ばかり。私はこの話を聞きたびに、「またかあ…」と自分のふる里がだんだんと嫌がられている事がとても悲しく思っていました。

そんな中、私も一つの体験をしました。部活の大会の日のことです。

「うわ、なんでいるの。放射能がうつる。帰れよ。」

すれ違いざまに他校の生徒に言われた言葉です。私は、この言葉を言われたとき泣きたくなくなり、大会すらやる気がなくなりました。新聞やニュースなどで得た少しの知識だけでこういう風に思っている人がいると、聞いてはいたものの、残念で仕方ありませんでした。何気なく言った言葉だったのかもしれないませんがその言葉は、大熊町に住んでいた私にとつて非常に悔しく悲しいものでした。家に帰り、その出来事を母に話すと、母は別の話もしてくれました。ある小児科では、受診してくる地域の子供を守るため大熊の人は診察しない。ある保育所では、やはり預かっている子供を守るため近くに大熊の人の車を駐車させないという内容でした。自分の「人権」を守るためなら相手の「人権」は傷つけてもかまわないのでしょうか。私はまちがった情報が、そういうまちがった守りを生む、原発事故について、しっかり学び正しい知識を得ることが差別をなくすのだと気付きました。

差別というのは、私たちのまわりでは身体の障害や病気を理由にした差別、性別・年齢国籍の違いによる差別など小さなことから大きなことまで本当によく耳にします。差別をしている側からすれば、それを冗談だという人も多いのです。たとえ冗談だとしても心ない言葉の一つ一つが相手をどれだけ傷つけるのか気づいてほしいものです。小学校の時から私たちは道徳などでいじめや人権などについて学んでいてもなかなかそれがなくならないのは、そういうせいなのかもしれません。私に言ってきたあの子達もそうだったのかもしれないませんが、実際に差別されている側はみんなの想像よりはるかに傷ついていると

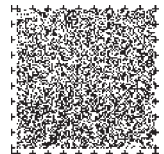


いうこと、つらいということ、そして悲しいということを私は、この人権作文を通して、たくさんの人に知ってほしいのです。

最近では過剰なマスコミやメディアにでてくるコメントーターの個人的感情が、ストリートに入ってきて私達の意識に大きな影響をあたえているような気がします。

しかし、自分の体験を通して感じたことは、一つの問題に対して人の言葉をすべてうのみにするのではなく真実とはなんなのかを見つけだすことが人権を守ることにつながるのだと思います。私たちが差別をなくすためにできること、それは、その人、その出来事についてしっかり知ること、知ろうと努力すること、正しい知識を深めるために学習することではないかと思います。我々も自分らしく生きる。これが「人権」を尊重することだと思えます。「人権」について考えること。それはとても難しいことのように思えますが、意外と簡単なことではないでしょうか。

今、私が住んでいる柏崎は実際、放射能の心配がないせいなのか、それとも大熊町と同じように発電所が隣設されているせいなのかまったくさういったいやがらせはありません。私は改めて、そんな今があたりまえではないという現実を忘れてはいけなと思います。同じ人間同士が平等に並んで歩くための権利。だれもが生まれながらにもっている大切なもの。自分も相手も同じひとりの人間として心に寄り添い、真実を見極め、理解し合う努力こそ、差別をなくし人権を守る大きな力になると思います。そして、私自身も差別や偏見、いじめがなくなるように強い心をもって、まずは自分から立ち向かっていきたいです。

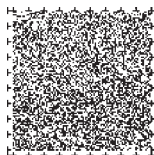




法務副大臣賞

## あたりまえの普通

茨城県 土浦日本大学中等教育学校 三年

ひろせ  
廣瀬 裕貴

「かわいいそうに……。大丈夫?」

そんな言葉を、何度かけられてきただろうか。物心ついた時には当たり前のように、周囲の人の人は僕にそう言った。生後七か月で発症した消化器疾患の影響で、僕は一才になる前から、ミルクや食べ物をお口にする事ができなくなった。そのかわりに、中心静脈栄養によって、生きていく為に必要な栄養を摂っていた。それは、心臓近くの太い血管に胸や首からカテーテルを挿入し、二十四時間点滴の機械で高カロリーの輸液を送り込むものだ。だから僕の身体からは太いチューブが出ていて、移動する時は大きな点滴の機械が常に一緒だった。もちろん、生活の場は病院だ。

病院の中では、僕は特別ではなかった。同じように二十四時間点滴に繋がれている友達はたく

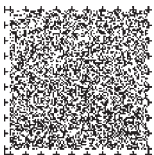


さんいたし、呼吸機をつけてストレッチャーで散歩をしたり、腹膜透析の機械に繋がれたまま遊んでいる事も特別ではなかった。僕には、耳の聞こえない友達、言葉が話せない友達、目の見えない友達、歩けない友達、寝たきりの友達、意識がなく呼吸機に繋がっている友達がいる。そんな中で、僕は特別ではないどころか、普通に日常生活を送っていたし、楽しい事や嬉しい事だつて沢山あった。

僕の両親も、僕を特別扱いはしなかった。僕の成長にあわせて、同じ年頃の子供達が経験している事は、可能な限り僕にもその機会を与えてくれた。アルバムを開くと、大きな点滴のポンプをキャリアに積んで、いろいろな所へ出かけた時の写真がある。主治医の先生には、随分無理なお願いもしたようだ。春には桜の花のトンネルをくぐったり、夏には公園で水鉄砲を楽しんだ。秋にはコンサートにも行ったし、冬には雪遊びだつてしていた。葉の影響で、骨が弱く感染しやすい僕が病院の外に出る事は、相当な覚悟と細心の注意が必要だったが、両親は普通にこだわって僕を育ててくれたし、病院でのこの生活しか知らない僕にとって、これが普通の事だった。

三年半の入院生活を経て、僕は退院して幼稚園に通う事になった。これも、僕にとつて簡単な事ではなかった。大きな点滴の機械は小さな携帯用に変わり、輸液バックと一緒にリュックに入れて背負う練習から始まった。そして、受け入れてくれる幼稚園を、両親は一生懸命に探してくれた。三年保育の年少さんで入園したその日から、僕の普通の生活は激変し、普通が特別に変わっていったしまった。この時ようやく、僕はあの言葉の言意を理解するのだった。

「かわいそうに…。大丈夫？」



僕は重いリュックを背負って、歩くのがやっと。階段も登れなければ、走る事もできなかったし、水分制限・食事制限はとても特別な事だと知った。そして何より、機械に繋がっている僕は、特別な存在として定着したのだ。

そんな特別な日常の中で、矛盾を感じる出来事も多くあった。外見上、点滴のチューブと背負っているリュックにさえ目がいかなければ、僕は普通に見える。あるショッピングセンターの障害者用パーキングに母が車を停めた時、一人の男の人が近付いて来てドアを叩いて大声で言った。

「ここがどういうスペースか、考えたらどうだ。あなたみたいな人が居るから、本当に必要としている人が使えなくなるんだ。」

母は少し悲しそうな顔で、静かに答えた。

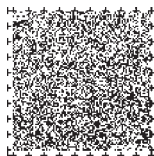
「必要とする一人なんです。」

それでも、男の人は納得しないのか、僕達が車を降りるのを待っているようだった。母は車を降り、トランクから僕の子椅子を降ろした。体力の無い僕は、長い距離を歩く事が難しく、車椅子を利用する事も多かったからだ。するとさっきの男の人は、

「まぎらわしいな…。」

と、怒ったままその場を離れて行った。

多くの人のおかげで、僕は今、元気に生活する事ができるようになった。僕は、障害者とか健常者と言う言葉が、あまり好きではない。なぜなら、その境目が僕には見えないからだ。あの駐



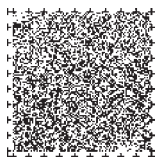
車場で出会った男の人も、決して間違った事は言っていない一方で、大きな間違いをしてしまったのは、その境目に気付かなかつたからだと思う。一言で障害者と言っても、さまざまな状況の人が居ると言う事を、日常生活の中で深く考える事はそう多くないと思う。そんな中で、障害を持つ人達が、少しでも普通に生活していくには、特別な存在にしない事が大切なのだ、僕は自分の経験の中から学んできた。

「かわいそうに…大丈夫？」

同情して、そう言葉をかけるのではなく、

「何かお手伝いする事は、ありませんか。」

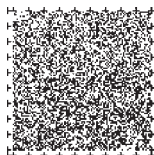
そう言って、さりげなく支えあえる社会になる日が来るように、両者の立場を知る僕だからこそできる事を、考えていきたいと思う。



法務大臣政務官賞

## 架け橋

愛媛県 松山市立南中学校 三年

井門いもん  
珠栄たまえ

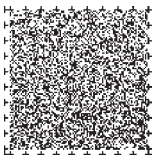
近年、韓流ブームと言われ、韓国ドラマ、映画、音楽などが大流行しています。それにともない、韓国に旅行に行く人、韓国の食べ物やファッションに興味を持つ人も増えてきました。ケイポップの話題は、私の周りの友人たちの会話の中にもよくのぼってきます。私の母は韓国人であり、私自身も、二年間韓国の学校に通ったことがあるので、韓国語が話せる私に、「この歌詞の意味は」とか、「正しい発音は」などと聞かれることもよくあります。その時、とても楽しい会話が弾みます。逆に、韓国では日本のアニメやドラマが毎日のように、テレビで放映されています。このように、特に若い世代では、日本と韓国、互いの文化に興味を持ち、良い関係を築いているように思えます。しかし、それが、表面的で危ういものであることを知ってほしいと思います。

一九一〇年、日本は武力を背景とした植民地政策を押し進め、以後、一九四五年まで、植民地支配は続きました。植民地時代の韓国では、朝鮮史を教えるのが禁止され、日本史や日本語が教えられました。また、皇民化の名のもと韓国名を日本名に変えさせられました。母国語と自分の名前を奪われたのです。それ以外にも、韓国の文化を侮辱され、否定されたと聞きました。

私の曾祖父は、植民地時代、福岡の強制労働所にいました。重い荷物を運ぶなど、日本人がやりたくない仕事を無理矢理させられていたそうです。妻と子どもを母国に残し、辛く悲しい日々を送りました。曾祖母は、一家の労働力を奪われ、いつ帰ってくるか分からない夫を思いながら、苦しい生活に耐え、子どもを必死で育てました。その間にも、日本人は戦争に必要なだからと言って、家にあつたわずかな鉄製の日用品を勝手に持って行ったり、お腹が空いているのに、米を奪っていったりしました。飢えて亡くなる人も多くいました。また、近所には、神風特攻隊に入れられ、自爆した人もいたそうです。

戦争が終わり、植民地から解放された後も、日本人の韓国の人々に対する優位の意識は変わりませんでした。在日と呼ばれる人々は、町の中に住居を持つことを許されず、町から少し離れたところに住みました。大人の中には、子どもに、在日の子どもとは仲良くするなど教える人までいて、ひどいいじめが横行したそうです。それは、想像できないほどのものでした。それでも、自分の国籍を捨てず、在日として生きてきたのは自分の国に誇りを持っていてからだと思います。

私が韓国の学校に通っていた二年の間、忘れられない出来事がありました。

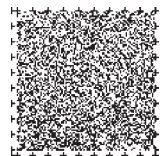


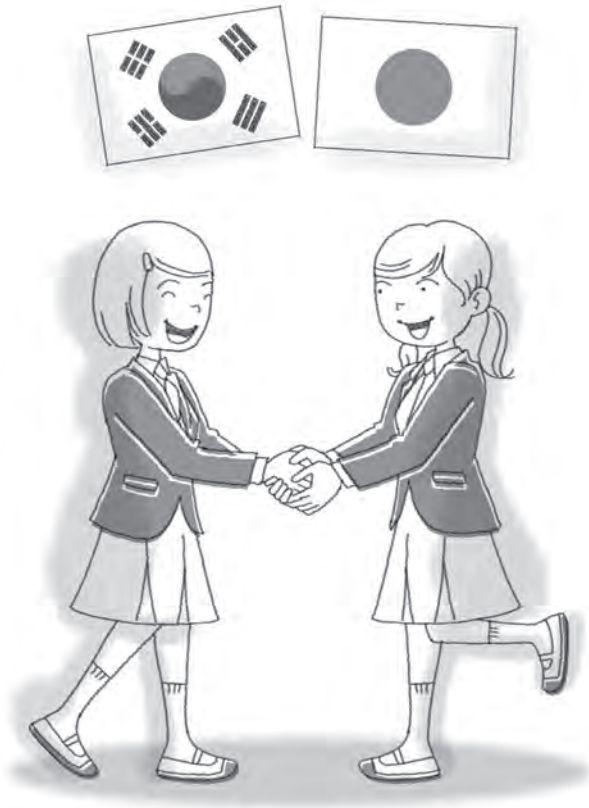
授業中、日本に関する話が出ると決まってわざと私の方を見て、嫌な顔をしてくる人がいました。私自身、植民地時代に日本人がどれだけひどいことをしてきたかを、いろいろな場面で、いろいろな人から聞きました。私の父が日本人であることを白い目で責めていたのでしょう。私は親しくなった友人たちに、多くの日本人が植民

地時代、韓国で行っていたことを知らなかったこと、一部の人が行っていたことではあるが、そのことを知って反省をしている人たちが確実にいるということを伝えました。また、日本人の父はたいへん優しい人であることなどをたびたび話しました。仲良くなった友達も多く、お互いを尊重して学校生活を楽しく過ごすことができました。

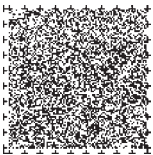
そして、ある歴史の授業でした。植民地時代の話になった時、何人かが一斉に私を振り返って見ました。その時、突然、私の友達が「過去の事実かも知れないけど、井門ちゃんには責任はないでしょう。井門ちゃんは、思いやりのある人だよ。」と立ち上がって言うてくれたのです。私を通して、日本人を認めてくれたようでとてもうれしかったです。

国が違って、文化が違って、どちらが強者でも、弱者でもありません。尊重されるべき、一人一人の人間がいるだけだと思います。相手を理解し、認め合って生きていこうとするとき、過去のことを無視したり、隠したりするのは、相手をかえって怒らせる行為です。だから私は、植民地時代の悲劇に真剣に向きあってもっと知りたいと思います。それと同時に、韓国と日本は、日本列島と朝鮮半島の距離の近さから、古代からの歴史上のつながりは深いものがありました。歴史の悲劇をしっかりと学びつつも、それにとらわれすぎて、両国の交流による光の部分をおぼ





はいけないと思います。私は、日本人と韓国人の親から生まれました。父と母、私は二人を尊敬して育ちました。だから、私は二つの国の架け橋。今後、日本と韓国が平和に協調していける関係を築いていけるためには、問題は多くあります。でも、若い私たちが、互いの人権を尊重する気持ちを磨いていき、差別のない共生社会を実現させていきます。



全国人権擁護委員連合会長賞

# 僕の父親

熊本県 熊本県立八代中学校 一年

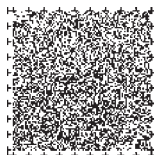
松田 裕季  
まつだ ゆうき

「ただいま。やったあ、今日はカレーだよ。」

僕の父が作った特製カレーライスはお店に出してもいいくらいに、最高においしいです。僕の大好きなメニューの一つです。

僕の家族は、父と母、兄の四大家族です。僕の父は、同じ八代の学校で仕事をしていますが、早く帰ってくるが多く、洗濯や掃除を毎日パツパとこなしています。僕が服を脱ぎっぱなしにしていると、すぐに注意してくれ、次の瞬間、服は片付けてあります。

母は毎日、僕より遅く帰宅することが多く、休日はほとんど部活動の練習や試合でいません。家族の中で家にいる時間が一番短い人です。つまり、皆さんのお父さんやお母さんと少し違うところがあるのです。それは、僕の家は、父親が家事をし、母親が外で働く家庭なのです。





なぜそうなったかというところ、保育園の時に僕たちのことを一番可愛がり、お世話をしてくれた祖母が亡くなり、父が子どもの世話をするといいことと仕事で辞めたからです。

「子どもたちのそばに大人がいたほうがいいから、俺が子どもたちのそばにいる。」

と言つて、長年勤めていた会社を辞めてしまったそうです。当時のことを聞くと、

「本当にそれでいいかわからなかった。本当は、男が働かなければならないのに。でも、仕事よりも子どもが大切だから。」

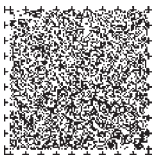
と言っていました。そんな父の言葉を聞いて、改めて父親の存在の大きさを知りました。母もその言葉を聞いたとき、

「こんな時、辞めるのは普通は母親の方なのに、本当にいいの？」  
と、不安に思ったそうです。

男女共同参画社会とは、

「男女が、社会の対等な構成員として、均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、共に責任を担うべき社会」のことです。これまでに、僕もあまり聞いたことがなかった言葉ですが、今回、母からうちの事情を聞いて知ることができました。僕も男の役割、女の役割を決めつけるのは反対です。男だからしなさい、女だからしなくていいという考えでは、やりたいこともやりづらい状況が出てくるからです。

また、母の男性の友達には、子どもの世話をするために十年ほど前に育児休暇を取られたそうです。その頃は、男性が育児休暇を取ることが珍しく、子どもと外を歩



いているだけで、

「あら、今日はお休みですか。」

と、近所の人から聞かれ、二日目までは笑って聞かれたけど、三日目からは話しかけてももらえなかつたらしいです。それは、おかしいと思いました。なぜ、お父さん

は子どものために仕事を休んだのに、近所の人に変な目で見られなくてはならないのでしょうか。

僕の父も、僕が三歳のころから保育園の送迎をしてくれたり、遠足も父と一緒に来てくれることが多かったです。小学校の頃は柔道の送迎や試合の応援もほとんど父でした。僕の父もそんな目で見られていたのでしょうか。

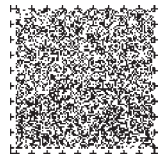
今の日本には、

「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである。」

という固定的性別役割分担意識と言う考えが根強く残っているため、男性が家事をしていると、変な目で見られることがまだまだあるようです。僕は、「女性が家事をする」と決めつけるのではなく、家事は家に行えばいいことであり、仕事から先に帰宅したほうがやれば、互いに気持ちよく過ごせると思います。

父が仕事を辞めて十年経った今、改めて気持ちを聞いてみると、

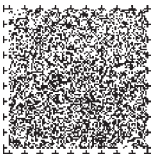
「最初はつらいこともあったけど、もう慣れたよ。特に、洗濯物を干すのは抵抗があったな。でも、昔から掃除は得意だったし、裕季たちといっぱい関わられたので、賢明な選択だったと思うよ。」



と、話してくれました。休みの日にゴロゴロしたり、お酒を飲み過ぎて僕とけんかしたりすることも多いけど、今まで大好きな柔道や野球を思いっきりやってこれたのも父がいてくれたおかげだと気づきました。

仕事を目一杯する母と、家で僕のお世話をしてくれる父。僕の家族は、ちょっと変わっているように見えるけど、実は、ごく普通の僕にとっては当たり前の家族です。

これからの僕たちは、「男だから・女だから」という差別的な考えを捨て、男女共同参画社会に対する認識を深めていく必要があると思います。話し合いで進んで家事を引き受けた僕の父は、やっぱり自慢できるかっこいい父です。父が作ったカレーは、僕の中ではナンバーワンです。

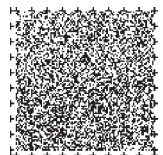


一般社団法人日本新聞協会会長賞

# オリンピックから見る人権問題

鹿児島県 霧島市立霧島中学校 三年

英 はなぶさ  
みずき



「この銀メダルが、グアテマラの子どもたちに勇気を与え、彼らが銃やナイフを置き、その代わりにトレーニングシューズを手にとってくれればいい。そうなったら自分は世界一の幸せ者だ。」  
二〇一二年、夏。場所はイギリス、ロンドン。世界中を沸かせたオリンピックがありまし。日本人選手団は、過去最高のメダル数を獲得し、日本人選手の活躍に日本中が釘付けになりました。しかし、私がこのオリンピックで一番心を動かされたのは、日本人選手の活躍ではなく、この言葉でした。これは競歩二十キロメートル銀メダリスト、エリック・バロンド選手という言葉です。メダル獲得者の誰もが、目標達成の喜びや支えてくれた周囲への感謝を述べているなか、彼だけは、自国の子どもたちの未来への希望を語りました。

グアテマラは中南米にある国です。三十五年以上続いた内戦の影響や政治情勢不安もあり、決

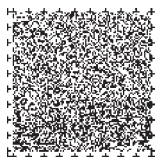
して治安が良いとはいえない状況にあります。軽犯罪は日常茶飯事で、犯罪者の九十パーセントが処罰されないと言われるほどです。麻薬密輸組織などが少年の犯罪組織を作り、日常的に子どもたちが銃やナイフを持って犯罪を犯しているのです。

彼の言葉には、強い強い思いが込められているように感じました。それは、母国の子どもたちが置かれている環境を変えたいという強い願いだと思います。

どのような環境にいても努力すれば結果はついてくる。だからグアテマラの子どもたちもスポーツでも、それ以外でも何か目標を持ち、それに向けてあきらめずに努力してほしい。それをエリック選手自身が、このオリンピックで証明したのです。国の情勢を考えると、日本のように、毎日オリンピックに向けて練習に励むことはできなかったことでしょう。毎日を無事に生きることで、精一杯だったかもしれません。その中で目標を高く掲げ、それに向かって努力し続けたからこそ、今回銀メダルを獲得することができたのだと思います。

わたしは日本に住み、何ら不自由なく毎日の生活を送ることができています。しかし、グアテマラのように世界には、私たちが毎日送っている普通の生活が送れない国が存在するのです。私はそのことを深く考えずに生きてきたことが、恥ずかしくなりました。同じ地球に住んでいるからこそ、みんなに平等に人権は与えられている。そう思っていました。しかし、実際は違ったのです。

この広い世界には多種多様な人種、文化、伝統があります。その分、それぞれの特徴や違いがあつて当然です。しかし、何があつても、人権に違いがあつてはなら

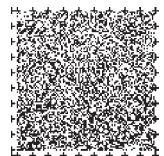


ないのです。子どもは生まれてくる場所を選ぶことはできません。それなのに、同じ子どもでも住む国や場所が違うだけで、自由に勉強ができ、好きなものを食べ、やりたいことができる子どもと、そうでない子どもがいる。この事実が、同じように人権の保障がされていないことを物語っています。

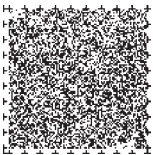
その事実を知った上で、私たちに何ができるのでしょうか。中学生の私には、この大きな問題をすぐに解決できるような名案は、思いつくことはできません。しかし、一つだけ分かったことがあります。それは、私たちが恵まれているということです。世界にはグアテマラのように、毎日命を危険にさらされて、自分の意志に従って生きることすらできない人たちがいます。その一方で、私たちのように毎日安心して、何不自由なく生きられる人たちがいます。私たちが送れている自由は、当たり前のことではないということです。このことに気づけたことは、私にとって大きな成長です。

地球上全ての人に、誰にでも等しい人権を与えるということは、今の私にはできません。しかし、多くの人が今の自分の置かれている状況に気づくことが、世界の不平等な人権を変える第一歩になると思うのです。一人一人の力はとても小さいものかもしれませんが、気づいた人から、「同じ地球に住んでいる誰にも、平等な人権を」という意志を持って、日々の生活を送れば、その意志が行動を変え、その行動によって、世界の不平等な人権が良い方向へと変わっていくのではないのでしょうか。

エリック・バロンド選手の言葉をきっかけに多くの人々が、この問題に気づくことができたの



なら、地球上の誰もが平等な人権を与えられる日が来る日が近いかもしれませんが。そして、グアテマラの子どもたちが、銃やナイフを置き、トレーニングシューズを手取る日が必ず来る。そう信じたいです。



日本放送協会会長賞

## 「トイレの絆」

高知県 芸西村立芸西中学校 三年

岡林 おかばやし  
一輝 かずき

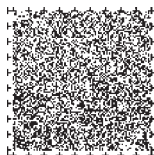
夏休みに入って何日か経った頃、母が僕に言った。

「今日は仕事が遅くなるから、母屋のポータブルトイレを洗つといて。」

僕の家から歩いて三分くらいにある母屋には、八十五歳の祖父と、八十一歳の祖母が二人で住んでいる。祖父は在宅酸素療法をしていて、週に四回デイサービスに行く以外は、家でほとんど寝たきりで、高齢の祖母が食事やトイレの世話をしていた。ところが、その祖母が土間で転倒し、右足のかかとを骨折。数ヶ月の間、足を固定して安静にしなければならなくなった。

母屋は築百年以上経つ古い家で、台所は土間だし、トイレと風呂は外にある。松葉づえをつけない祖母は何一つ動きがとれない。

それからというもの、一人娘の母はてんでこ舞いだ。朝は四時半に起きて僕らの弁当と祖父母





の朝と昼の弁当を作る。母屋に行つて弁当を渡し、ポータブルトイレを洗つて仕事に行く。夜帰つた後、僕らの夕飯と祖父母の晩の弁当を作る。母屋に行つて弁当と洗濯物を渡し、ポータブルトイレを洗う。祖母の一日分のグチを聞く。家に帰つて明日の弁当の準備をする、というのが日常になつた。

土曜日には祖母を風呂に入れるため、父が僕の家の一階にある風呂まで背負つて運び、置き物のように動かない祖母を母がゴシゴシ洗う。

「動けないくせに口の達者な年寄りほど厄介なものはない！」と、ぼやきながらも甲斐甲斐しく世話をしている。

そこで僕は、少しでも力になると部活の帰りに母屋に寄つた。

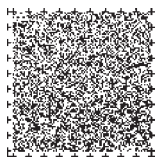
「おばあちゃん、トイレ換えに来たで。」

と、ポータブルトイレのふたを開けてびっくり！そこにはビールの小ビンくらいあるでっかいウンコがでーんと居座つていた。

「うわーっ！」僕は思わず叫んだ。祖母は顔を覆つて

「ヒツヒツヒツ…」と恥ずかしそうに、でもちよつと誇らしげに笑い、

「あなたの母ちゃんに遠慮して、大便是週に一回しかせんことにしたわ。」と強がりと言つた。どうやら僕は、その一週間目に当たつたようだ。ずっしりと重いバケツを持ち上げつつ外のトイレに向かつた。不思議と「汚い。」とか「嫌だ。」とは全く思わなかつた。むしろこの年齢でこんな立派なウンコが出せるとは、やはり祖母は



ただ者ではないと感心した。トイレにザッと移しても、そのウンコだけはビクともしない。勢いをつけてもう一度バケツを傾けてみた。ウンコはゴロゴロゴロと音を立てて落ちた。そして母に言われたとおり庭の水道でバケツを洗い、青い防臭液を入れて元に戻した。僕はなぜか今までに味わったことのない達成感でいっぱいになった。

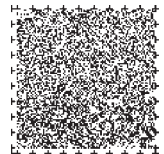
その後、朝と晩のトイレの始末が僕の日課になったある日、僕は祖母から手紙を渡された。果たした状のように折りたたまれた紙を恐る恐る開けてみると、それはきれいな字で書かれた「感謝状」だった。そこには僕が産まれたときの様子から始まり、現在までの僕への思い、自分の不注意で皆に迷惑をかけて申し訳ないこと、僕が黙ってトイレの始末をすることに對し、情けない気持ちと感謝の気持ちで毎日泣いていること、口に出して

「ありがとう。」

と言えないもどかしさが切々とつづられていた。

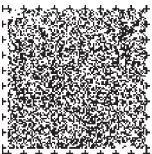
僕は単純にうれしかった。と同時に、いつも親分肌でごう慢な祖母の意外な一面に、今回の骨折のダメージは相当大きいということが分かった。

祖母の骨折によって、僕も、母も、父も、妹も、毎日すごく大変だけど、今何事にも代えがたい貴重な体験をしている気がする。というのは、いくら祖父母が長生きをしたとしても、年齢的にあと何十年も生きることはない。別々の家で別々の生活をし、近いようで遠い中途半端な関係のままであつただろう。でも、今回の骨折事件が家族の絆を深め、限られた時間をより充実した



ものにする、良いきっかけになったのではないかと僕は思っている。  
もうすぐ夏休みが終わる。

僕は今日もポータブルを換えに母屋に行く。二人とも、どんなウンコしてるか、ちよつとドキドキしながら。



## 法務事務次官賞

## 「立ち止まる」

東京都 小金井市立小金井第二中学校 二年

くまがい  
熊谷 瑞生  
みずき

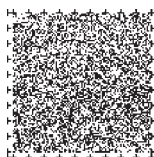
「右目の視力が低く、内斜視になっています。けれどまだ成長段階ですから、メガネで矯正できませんよ」

眼科医からそう告げられた時、僕は五歳で「斜視」の意味も分からず、母から与えられたメガネを新しいオモチャでももらったように、喜んで掛けていた。

問題は小学校二年の時に起こった。

校庭で遊んでいると中学年の男子生徒が数人近寄って来て、突然僕のメガネを取り上げると、宙に投げるようにパスを繰り返して、返してくれなかったのだ。そして最後に受け取った男子生徒が地面にメガネを叩き付けた。

メガネは、弦の部分が曲がり、レンズも外れて転がっていた。何が起きたのか分からなかった。



壊れたメガネをティッシュに包み、家に持ち帰って母に渡したとき、理由を聞かれたが本当のことを言えず、友達と遊んでいて壊してしまったと嘘をついた。

それからも中学年は、僕をみつける度、メガネを取り上げたり、頭をこづいたり、いきなり突き飛ばしたり、ことあるごとに嫌がらせをした。それを見ていたクラスメートも、だんだん面白がるようになり、誰かが僕のことをある名前で呼び始めた。

「メガネ猿」

クラスメートのからかいが増すごとに酷くなり、僕は学校に行くのが怖くなった。

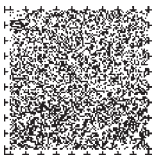
ある日、母が仕事に出た後を見計らい、ランドセルを背負ったまま家に帰ると自分の部屋にもった。

どうして、こんなことになったのだろう。メガネをしているから？僕が「斜視」で顔が変だから？胸の奥が熱くなり、鉛のような重いものがせり上げてきた。

その日、登校してこない僕を心配して、担任の先生が家に来てインターホンを鳴らし続けた。二月の寒い日で、風が冷たく、雨も降っていた。それでも先生は何どもインターホンを鳴らし続けた。連絡を受けた母も会社を早退して帰って来て、先生と一緒に家の扉を開けた。僕をみつけた先生は「よかった。家にいてくれて。事故にあつたか、悪い人に連れていかれたかと思つたよ。明日は学校にちゃんと登校してね」と優しく笑った。

先生は一言も僕を責めたりしなかった。

あくる日、先生から学校に行かなかった理由を尋ねられ、僕は本当のことを話した。



「メガネ猿」と毎日友達からからかわれるのが辛かったこと。中学年の男子生徒が怖かったこと。話終えると、あのせり上げていた鉛の塊が、僕の口から、転がり落ちた気がした。

「僕がメガネをかけているから、変だから、みんなが意地悪をするのですよね」

すると先生は、頬を紅潮させて言った。「違うよ。瑞生君は何も悪くない。人と違うところがあっても何も悪くない。メガネをからかう友達がいけないんだよ。」

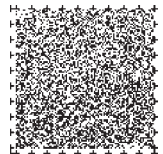
先生の言葉を聞いた時、何故だか前がくもって見えなくなった。レンズには僕の涙がいくつも付いていた。

今の僕なら「メガネ猿」と呼ばれても、聞き流せるし、猿の真似くらいして相手を笑わせることもできる。

時々、「そんなことくらいで傷ついてどうするの。もっと辛いことをされたり、言われたりする人がこの世には大勢いるんだよ」と言う人がいるが、僕は違うと思う。人の心の痛みは他人と比べることが出来ない絶対的なものだ。その人が辛いと感じるなら、心のバケツが一杯になってしまっているのだから、より大きなバケツになるには、その人のこれからの経験が心の筋肉を強くするまで、時間がかかるものだと思う。

言葉は、時にその人の心を深く傷つける。特に人と違う点や、人とは劣っていると思っていることを、何度も繰り返し集団の中で言われているうちに、傷は深く、深くなる。

言葉とは、他人にものを伝える上で大切な手段にも関わらず、何も考えずに発した一言で相手



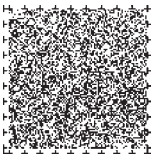
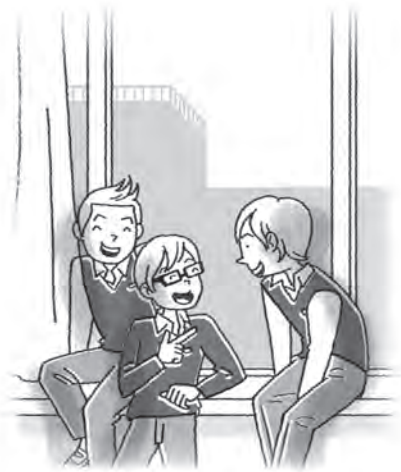
の胸の中に冷たく重い鉛の塊をも作り出してしまふほど、猛毒になり得るのだ。

一方で、言葉は他人を救う暖かい毛布にもなる。

あの時先生が「瑞生君は何も悪くない」と言ってくれた言葉は、僕の胸に詰まった重く冷たい塊を少しずつ溶かしてくれた。

十四歳になって僕は思う。人と話す時、一度「立ち止まろう」と。これから僕が相手に言う言葉は毒になってしまわないか、それともほんの少しでも相手の気持ちを和らげたり、楽しくさせたりできるだろうか。毛布のような言葉で、相手の冷え切った感情を温めてあげることができるだろうか。

僕は立ち止まって、一呼吸おき、今日も友人や家族と言葉を通して、強くて優しい結びつきを築けていけたらと思う。

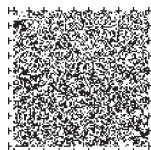


法務事務次官賞

# 小さな段差、大きな障害

埼玉県 学校法人開智学園開智中学校 一年

榎本 毬乃  
えのもと まりの



「すみません。」

私は勇気を振り絞りました。

「すみません。助けて下さい。」

信号はすでに点滅を始めて、今にも赤に変わりそうです。私が押していた祖父の車いすのキャスターが路面と、低くなっている歩道とのほんのわずかな段差に引っ掛かり、動きが取れなくなっていたのです。まだ小さくて力のなかった私を、通りかかった一人の女性が助けてくれました。私たちは心からお礼を言いました。

ショッピングモールのスロープは、一人で歩くには大して苦勞もない、わずかな勾配です。しかし、子どもたちをはじめとした歩行者への配慮でしかれた厚手のカーペットは、残念ながら車

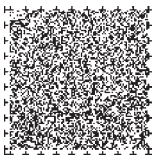


いす利用者にとって、必ずしも優しい配慮とは限りません。実際、車いすで登るには、「さあ、登るぞ。」という、特別な覚悟が必要でした。祖父も、できるだけ私に負担をかけないように、手に力を込めます。途中で力を抜くと、車いすの重さに押し戻されそうになります。私は申し訳なさそうな祖父の表情を見るのがつらくて、スロープの手前に来るたびに、なんでもない素振りをしました。そんな私の作り笑顔に祖父は気づいていたはずです。祖父が握るハンドリウムからそれが私に伝わってくるのです。私たちにしかわからない、切ないような、なんとも言えない気持ちになるのです。

エレベーターに乗るにも、気を遣います。車いすを押して、混雑したエレベーターに乗り込むのは気が引けて、乗り入れるスペースのあるエレベーターがくるまで、何本も待つこともありました。

なにより苦労したのが放置自転車です。駅前広場には、いつもたくさん自転車が並んでいます。猛暑のある日、私は一台の自転車に車いすを引つ掛け、自転車は次々と倒れていきました。多くの人に笑われたような気持ちになりました。もうどうしようもなく悲しくて、いったい何人の人が手伝ってくれたのか、私は見ていません。祖父に日傘をかざしてくれた女性も、私は見ていません。私が覚えているのは、あの時の気持ちと、自転車がとても熱かったということだけです。

祖父が車いすでの生活を余儀なくされてから、私は祖父と一緒に、多くのことを学びました。それは、その人の立場に立つてみないとわからないことが、社会には

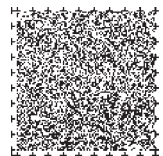


たくさんあるということです。私たちは、わずかな段差を難なくまたぐことができず、その段差がバリア（障害・障壁）であることを見過ごしています。車いすを押すといった経験をしなければ、以前からそこにあった危険性を私は今でも知らずにいたでしょう。祖父とスロープの手前で感じた、途方に暮れるような気持ちにも、

きつと出会えなかったことでしょう。また、何度もエレベーターを待つ経験がなければ、後ろに車いすや、ベビーカーを押している人が並んでいないか、振り返って確認する自分には、なれなかつたかもしれません。そして、放置自転車の問題に、関心を持つこともなかつたと思います。

バリアフリー新法では、車いすと車いすがすれ違える廊下や通路巾（一・八m）の確保が、利用円滑化誘導基準となっています。しかし残念なことに、駅前広場はもはや広場ではなく、まるで自転車置き場のようになっています。私は毎日のように駅を利用してきたにも関わらず、自転車が放置されている景観に、何の疑問も抱きませんでした。毎日眺めているうちに、それが当たり前のように見えていたのです。車いすを押す立場に立って初めて、その景観がなにか異常なもののように感じられるようになったのです。困ったことのない人が、困っている人の立場に立つて考えることは、思っているより難しいことです。私たちの暮らす社会には、障害者や高齢者など、いわゆる交通弱者にとってのバリアが、まだまだたくさんあるのです。

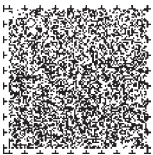
祖父との経験を通じて、私たちは「低い目線の社会」を目指すべきなのではないか、と考えるようになりました。「低い目線の社会」とは、車いす利用者や、小さな子ども、杖をついた高齢者のように、実際に目線の低い生活をする人たちが暮らしやすい社会のことであり、また、健常





者と呼ばれる人たちが、自ら目線を下げて、交通弱者への十分な配慮を考えることのできる社会です。私たちが福祉国家を目指すには、まずは身近なバリアを取り除くこと、いいえ、まずはバリアがあることに気付くことから始めなければなりませんと思います。

私は毎日の生活の中で、こうしたバリアに敏感な人間になりたいと願っています。そして、バリアの存在を、なるべく多くの人に伝え、「低い目線の社会」の実現を目指していこうと思います。私にこうしたことを気付かせてくれた天国の祖父に感謝します。



## 法務事務次官賞

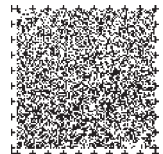
## 鉄ちゃんへ

宮崎県 宮崎大学教育文化学部附属中学校 三年

坂元 さかもと 遼太郎 りょうたろう

ヒサちゃんが亡くなったので鉄ちゃんは一人ぼっちになった。ヒサちゃんは享年七十八歳 鉄ちゃんの奥さんで優しい人だった。鉄ちゃんは僕の祖母の弟で母の叔父にあたる。母とは親子のように仲が良く僕は孫のような存在だ。本来ならば鉄三おじいちゃんとかヒサおばあちゃんとも呼ぶのだろうが、子供の頃から鉄ちゃんヒサちゃんと呼んでいる。

鉄ちゃんは老後を生まれた町で過ごすために、東京で自営していた工場を弟に譲りヒサちゃんと二人で海辺の町に帰ってきた。毎日、漁師のように潮と天気を気にして釣り糸を垂れ、食べる分だけ釣れると帰ってくるという暮らしをしている。鉄ちゃんの家の大きなガレージの上には梯子で登っていく秘密基地のような小部屋があり、そこには大切にしている釣り竿と、鉄ちゃんの手作りのルアーと、それらの道具で釣りあげた八十センチもある平目や二メートル以上のハモの



魚拓が壁に貼ってある。僕は鉄ちゃんの家遊びに行く度に、その魚拓の大きさに感心し、鉄ちゃんが格闘した海へ思いを馳せる。それから、ルアーを見せてもらい、中に鉛を仕込む構造やうろこの貼り方、塗装の仕方などを教わる。鉄ちゃんは天才的にもものづくりの上手い人で、そのルアーは水に入れて引くと、どれも生きている小魚のように泳ぐのだ。

「好きなのを欲しいだけ持っていいよ。」

と鉄ちゃんは言う。そんな時は決まって隣からヒサちゃんが

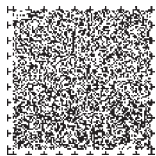
「遼くん、遠慮しないでいいのよ。いっぱいもらって行きなさい。鉄三さんはまた木切れからいくらでも作るんだから。」

とバルサ材をさしながら言ってくれたものだ。僕は嬉しくて、でも調子に乗らない程度に気に入ったルアーを数個頂く。その嬉しい気持ちといったら何にたとえられるだろう。

五月の晴れた日には、潮干狩りに一緒に行つて貝の取り方を教えてくれた。貝を見つけるコツは貝の呼吸する穴を探すことである。波がさらつて平らになつた砂浜にわずかだが小さなへこみが見えるのだ。僕は全く見つけられない母さんを横目に鉄ちゃんと同じくらいその穴を見つけることができたので、大きなあさをたくさん掘り当てた。鉄ちゃんは

「心の目で見らんといかんからな、遼くんには見えるんだなあ。さすがだなあ。」

と日に焼けた顔をくしゃくしゃにほころばせて褒めてくれた。僕とはおじいちゃん程に歳が離れているけれど、心はハックルベリーのような人なのだ。僕はそんな鉄ちゃんをとても尊敬している。



一人になった鉄ちゃんのために何をすべきなのだろう。鉄ちゃんはみんなの前では元気でいるけれど、皆が帰るとヒサちゃんの残した宅配便の文字などを見ても涙が出るのだと祖母が言った。いつも優しくしてもらっているのに、僕にはかける言葉も無かった。

葬式の時、親戚がいる中で鉄ちゃんが僕に

「受験や部活で忙しいのにすまんね。」

と言った。僕はこんな大人のあつまりで直接お礼を言われて言葉に詰まった。

「いえ、ヒサちゃんは僕にとって、とても身近な人だったので。」

と頭を下げながらやっと言うと祖母が

「まあ、なんて優しい言い方をするんやろねこの子は。」

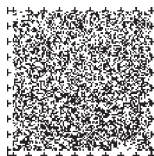
と言った。そうかな、僕はいつだってそう思っている。むしろただどしくて慰めの言葉にもならないと思っただのに。その時、僕がこれから鉄ちゃんにできることは気持ちに言葉にすることだと思っただ。

鉄ちゃんは帰り際、僕達の車に向かって

「遼くん、たまには釣りに来てくれよ、絶対な！」

といったもの笑顔で手を振ってくれた。

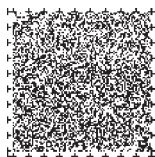
「独居老人の孤独が問題になっている。人々が老人に無関心なのだろうか、そうではない。かけられる言葉をかけないのだ。『大切な人だ』とか『尊敬している』と心で思っても口に出して言





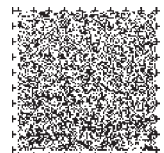
うことは難しい。照れくさいし場違いな気がするのだ。老人とは使う言葉も笑いや怒りの感覚も違うので、話せないような錯覚を持つ。しかし言葉の本質は同じではないのか。日本語を共有するこの日本の中で、一人暮らしの老人が熱中症で倒れても誰も気がつかないという現状が今の日本にはある。誰かが気持ちを言葉にしていれば助けられた命があるのではないだろうか。

受験勉強もあるけれど、頑張つて鉄ちゃんと呼びをしながら釣りをしている時間をつくろう。そして、鉄ちゃんのルアーを海に向かって投げながら語らうのだ。僕に何の話ができるのか分からない。でも、男同士、釣り好き同士、分かりあえることはたくさんある。鉄ちゃんを一人ぼっちには絶対しない。





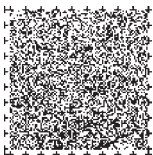
法務局・地方法務局名	郵便番号	所在地	電話
金沢地方法務局人権擁護課	921-8505	金沢市新神田4丁目3番10号 金沢新神田合同庁舎	076-292-7804
富山地方法務局人権擁護課	930-0856	富山市牛島新町11番7号 富山合同庁舎	076-441-6376
大阪法務局人権擁護部	540-8544	大阪市中央区谷町2丁目1番17号 大阪第2法務合同庁舎	06-6942-9492
京都地方法務局人権擁護課	602-8577	京都市上京区荒神口通河原町東入 上生洲町197番地	075-231-0131
神戸地方法務局人権擁護課	650-0042	神戸市中央区波止場町1番1号 神戸第2地方合同庁舎	078-392-1821
奈良地方法務局人権擁護課	630-8305	奈良市東紀寺町3丁目4番1号 奈良第2法務総合庁舎	0742-23-5457
大津地方法務局人権擁護課	520-8516	大津市京町3丁目1番1号 大津びわ湖合同庁舎	077-522-4673
和歌山地方法務局人権擁護課	640-8552	和歌山市二番丁2番地 和歌山地方合同庁舎	073-422-5131
広島法務局人権擁護部	730-8536	広島市中区上八丁堀6番30号 広島合同庁舎3号館	082-228-5790
山口地方法務局人権擁護課	753-8577	山口市中河原町6番16号 山口地方合同庁舎2号館	083-922-2295
岡山地方法務局人権擁護課	700-8616	岡山市北区南方1丁目3番58号	086-224-5761
鳥取地方法務局人権擁護課	680-0011	鳥取市東町2丁目302番地 鳥取第2地方合同庁舎	0857-22-2289
松江地方法務局人権擁護課	690-0886	松江市母衣町50番地 松江法務合同庁舎	0852-32-4260
高松法務局人権擁護部	761-8077	高松市出作町585番地4	087-815-5311
徳島地方法務局人権擁護課	770-8512	徳島市徳島町城内6番地6 徳島地方合同庁舎	088-622-4171
高知地方法務局人権擁護課	780-8509	高知市栄田町2丁目2番10号 高知よさこい咲都合同庁舎	088-822-3331
松山地方法務局人権擁護課	790-8505	松山市宮田町188番地6 松山地方合同庁舎	089-932-0888
福岡法務局人権擁護部	814-0005	福岡市早良区祖原14番15号 福岡法務局西新出張所庁舎5階	092-832-4311
佐賀地方法務局人権擁護課	840-0041	佐賀市城内2丁目10番20号 佐賀合同庁舎	0952-26-2148
長崎地方法務局人権擁護課	850-8507	長崎市万才町8番16号	095-826-8127
大分地方法務局人権擁護課	870-8513	大分市荷揚町7番5号 大分法務総合庁舎	097-532-3368
熊本地方法務局人権擁護課	862-0971	熊本市中央区大江3丁目1番53号 熊本第2合同庁舎	096-364-2145
鹿児島地方法務局人権擁護課	890-8518	鹿児島市鴨池新町1番2号	099-259-0684
宮崎地方法務局人権擁護課	880-8513	宮崎市別府町1番1号 宮崎法務総合庁舎	0985-22-5124
那覇地方法務局人権擁護課	900-8544	那覇市樋川1丁目15番15号 那覇第1地方合同庁舎	098-854-1215





## 問合せ先一覧（法務局・地方法務局）

法務局・地方法務局名	郵便番号	所在地	電話
札幌法務局人権擁護部	060-0808	札幌市北区北8条西2丁目1番1 札幌第1合同庁舎	011-709-2311
函館地方法務局人権擁護課	040-8533	函館市新川町25番18号 函館地方合同庁舎	0138-23-9528
旭川地方法務局人権擁護課	078-8502	旭川市宮前通東4155番31 旭川合同庁舎	0166-38-1114
釧路地方法務局人権擁護課	085-8522	釧路市幸町10丁目3番地 釧路地方合同庁舎	0154-31-5014
仙台法務局人権擁護部	980-8601	仙台市青葉区春日町7番25号 仙台第3法務総合庁舎	022-225-5739
福島地方法務局人権擁護課	960-0103	福島市本内字南長割1番地3	024-534-1994
山形地方法務局人権擁護課	990-0041	山形市緑町1丁目5番48号 山形地方合同庁舎	023-625-1321
盛岡地方法務局人権擁護課	020-0045	盛岡市盛岡駅西通1丁目9番15号 盛岡第2合同庁舎	019-624-9859
秋田地方法務局人権擁護課	010-0951	秋田市山王7丁目1番3号 秋田合同庁舎	018-862-6533
青森地方法務局人権擁護課	030-8511	青森市長島1丁目3番5号 青森第二合同庁舎	017-776-9024
東京法務局人権擁護部	102-8225	千代田区九段南1丁目1番15号 九段第2合同庁舎	03-5213-1234
横浜地方法務局人権擁護課	231-8411	横浜市中区北仲通5丁目57番地 横浜第2合同庁舎	045-641-7926
さいたま地方法務局人権擁護課	338-8513	さいたま市中央区下落合5丁目12番1号 さいたま第二法務総合庁舎	048-859-3507
千葉地方法務局人権擁護課	260-8518	千葉市中央区中央港1丁目11番3号 千葉地方合同庁舎	043-302-1319
水戸地方法務局人権擁護課	310-0011	水戸市三の丸1丁目1番42号 (駿優教育会館)	029-227-9919
宇都宮地方法務局人権擁護課	320-8515	宇都宮市小幡2丁目1番11号 宇都宮地方法務合同庁舎	028-623-0925
前橋地方法務局人権擁護課	371-8535	前橋市大手町2丁目10番5号 前橋合同庁舎	027-221-4466
静岡地方法務局人権擁護課	420-8650	静岡市葵区追手町9番50号 静岡地方合同庁舎	054-254-3555
甲府地方法務局人権擁護課	400-8520	甲府市丸の内1丁目1番18号 甲府合同庁舎	055-252-7239
長野地方法務局人権擁護課	380-0846	長野市旭町1108番地 長野第2合同庁舎	026-235-6634
新潟地方法務局人権擁護課	951-8504	新潟市中央区西大畑町5191番地 新潟地方法務総合庁舎	025-222-1563
名古屋法務局人権擁護部	460-8513	名古屋市中区三の丸2丁目2番1号 名古屋合同庁舎第1号館	052-952-8111
津地方法務局人権擁護課	514-8503	津市丸之内26番8号 津合同庁舎	059-228-4193
岐阜地方法務局人権擁護課	500-8729	岐阜市金竜町5丁目13番地	058-245-3181
福井地方法務局人権擁護課	910-8504	福井市春山1丁目1番54号 福井春山合同庁舎	0776-22-5090





# 第32回全国中学生人権作文コンテスト中央大会審査員

作家（審査員長）	落合恵子
映画監督	山田洋次
一般社団法人日本新聞協会事務局長	川嶋明
日本放送協会解説委員室解説委員	友井秀和
文部科学省初等中等教育局視学官	三好仁司
全国人権擁護委員連合会長	内田博文
法務省人権擁護局長	萩原秀紀

（敬称略）

## 感想をお聞かせください

本作文集を読まれた感想等を下記の連絡先又は [keihatsu@moj.go.jp](mailto:keihatsu@moj.go.jp) までお寄せください。

## 転載について

本作文集の作品を、印刷物やインターネット上に掲載する場合は、下記の連絡先までお知らせください。

詳しくは、法務省ホームページ (<http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken111.html>) を御覧ください。

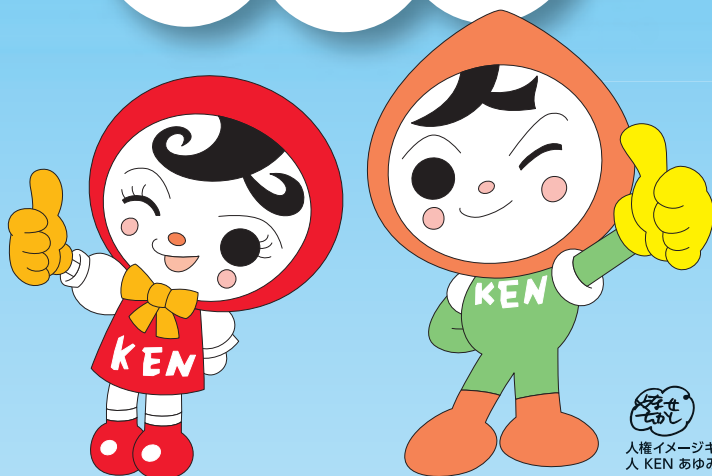
〈連絡先〉〒100-8977 東京都千代田区霞が関一丁目1番1号

法務省人権擁護局人権啓発課

TEL 03(3580)4111 内線5875

印刷 平成25年1月18日  
発行 平成25年2月5日  
発行者 法務省人権擁護局  
全国人権擁護委員連合会  
東京都千代田区霞が関一丁目1番1号  
電話 03(3580)4111 内線5875  
URL <http://www.moj.go.jp/JINKEN/>

「いじめ」や暴力行為等は人権侵害です。  
法務局・地方法務局では、  
人権侵害による被害を受けた方を  
救済するための活動を行っています。  
お気軽にご相談ください。



人権イメージキャラクター  
人 KEN あゆみちゃん・人 KEN まる君

みんなの人権110番 (全国共通)  0570-003-110

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

子どもの人権110番 (全国共通)  0120-007-110

ゼロゼロななのひやくとおぼん

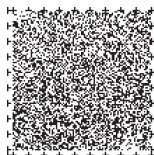
女性の人権ホットライン (全国共通)  0570-070-810

ゼロナゼロのハートライン

インターネット人権相談受付窓口  インターネット人権相談  

パソコンからは <http://www.moj.go.jp/JINKEN/jinken113.html>

携帯電話からは <http://www.jinken.go.jp/soudan/mobile/001.html>



Human Rights

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。